

奄美群島国立公園

奄美大島ストーリーブック

シマツチユ
島人が紡いできた
奄美大島の物語





高知山展望所から見た大島海峡（写真協力：公益社団法人 鹿児島県観光連盟）

もくじ
Contents

- 1. 奄美大島のストーリー P3 - P30
- 2. このストーリーブックが伝えたいこと P31
- 3. ストーリーブックの想い P32
- 4. ストーリーブック波及イメージ P33
- 5. 適正な観光を推進する利用ルール P34

- 6. ストーリーを実感できる、おすすめの場所・体験 P35 - P36
- 7. 奄美群島国立公園、世界自然遺産 P37
「奄美大島、徳之島、沖縄島北部及び西表島」
- 8. 参考文献 P39 - P40

Main Story メインストーリー

奄美大島の自然は、
大陸からの分断と隔離の地史の上に成り立っている。
その歴史は、奄美大島の自然のにぎわいを生み出し、
人は自然の恵みを受けながら文化を育んだ。
奄美大島は、
それらの価値を将来へつないでいくことの大切さ、
人と自然との関係を考えることの大切さを、
私たちに示している

およそ1000万年前、現在の奄美大島にあたる
陸地は、ユーラシア大陸の一部であった。その後、
気の遠くなるような長い年月をかけ地殻変動
や海面変動を繰り返し、奄美大島は島となった。
その地史を反映して、島に残った生きものが命
をつなぎ、独自の進化をとげ、同時に他にはない
自然環境が形成された。さらに、その自然環境が
後にやってきた人間の文化を育んだ。人々はそ
の自然を敬い、持続可能な形で利用してきた。
世界自然遺産に登録された奄美大島の自然
と文化は、その価値を将来へつなぐ大切
さを私たちに示している。

多様な

奄美大島には、この島の価値を象徴するストーリーがある。
それぞれのストーリーは、奄美大島の独自性を表し、「奄美大島ならではの」を構成
するものと言える。そして、これらのストーリーは、互いに関係しながら、複雑に交わり、
重なり合いながら、今、私たちが目にする奄美大島の景色を形づくっている。

将来へ引き継ぐ責任

〈ひとりひとりの行動と責任〉

文化とくらし

〈知恵と希望が紡いだ文化〉

人と自然の関わり

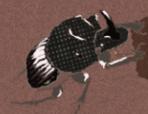
〈尊尊我無(とおーとがなし)の精神〉

自然環境

〈生きもののにぎわい〉

独自の地史

〈大陸からの分断と隔離〉



大陸からの分断と隔離の歴史が、 世界自然遺産に認められた奄美大島の、 固有の生きものと命のにぎわいを生み出した

その昔、地殻変動によって大陸から分離し奄美大島は誕生した。分離後、この島は大陸と一度もつながっていない隔離の歴史を有している。島に残った生きものは独自の進化を遂げ、この島には世界的にも貴重な数多くの固有種を含む多様な命が息づいている。アマミノクロウサギの祖先は大陸では絶滅したが、奄美大島と徳之島で生き残り、現在に至るまで命をつなぎ子孫を残している。こうした種は固有種と呼ばれ、奄美大島は他にも多くの固有種のすみかとなっている。亜熱帯の森林、溪流や河川、湿地、サンゴ礁や海まで連続する自然環境が、固有種のみならず無数の命を育み、あらゆる生きものが一体となり島の生態系を成立させている。

サブストーリー1へ(8ページから12ページ)

奄美大島の人々と自然との近さが、 島の価値観をつくり、 暮らしや風習を彩り豊かにする

この奄美大島では、人と自然が密接に関わりあうことで培われた価値観が根底にある。海と山に囲まれた集落(シマ)では、自然の万物に神が宿ると考え、畏敬の念を抱いてきた。自然のすぐそばで生きることが、資源を持続的に利用し、互いに支え合い、全ての出逢いに感謝し思いやるなどの独自の価値観を育んできた。それが、奄美大島ならではの精神として、今日まで紡がれてきている。これからも人と自然がよりよい状態で共に存在する、真に共生した島が望まれる。

サブストーリー2へ(13ページから17ページ)

奄美大島の文化は、 琉球や薩摩などの影響を受けながら、 人々の知恵と希望によって 力強く紡がれてきた

そして、この島の文化は、非常に複雑で重層的な歴史変遷の中で、受容とそれぞれのシマ独自の变化をしながら形作られてきた。島を代表する黒糖焼酎や鶏飯^{けいはん}、相撲などの文化には、琉球国や薩摩藩との結びつきが深く刻まれている。その背景には、支配のもとで生き抜いてきた人々の苦難や、未来への希望などがあった。いま、私たちの目の前にある言葉、音楽、食や風景は、決して当たり前にも生まれたものではない。その一つ一つに刻まれた過去の出来事や人々の想いに、少しだけ心を馳せてほしい。

サブストーリー3へ(18ページから23ページ)

奄美大島の自然環境は、 島に暮らす人や島を訪れる人など、 全ての人の責任と行動によって 将来へと引き継がれる

このような世界的にも類まれな価値を有する奄美大島の自然環境をどのように残し、将来に引き継いでいけるかは、これからの私たちの行動にかかっている。多くの生きものはその存在を通じ、私たちに様々な恩恵を与えてくれる。一方で、人の営みは、それまで隔離されてきた自然環境に影響を与えることがある。

外来種であるフイリマングースの導入による生態系への影響は、それを象徴するものであり、大きな教訓が残された。現在でも、目の前には外来種の問題、ロードキルや密猟、観光利用などの多くの課題が存在している。この島の自然環境を損なうことなく利用し、独自の文化を育みながら、人類共通の宝としてよりよい状態で後世に残していくため、島に暮らす人、島を訪れる人、ひとり一人が責任を持って行動することが重要となる。

サブストーリー4へ(24ページから30ページ)

鶏飯(写真協力:公益社団法人 鹿児島県観光連盟)



ショチョガマ(写真協力:公益社団法人 鹿児島県観光連盟)

これら唯一無二のストーリーを将来に残したいと願う多くの人々の、
長年にわたる想いと努力が実を結び、
2017年に奄美群島は国立公園に指定された。
さらに、奄美大島は2021年に徳之島、沖縄島北部及び西表島とともに、
世界自然遺産に登録された。



高倉 大浜海浜公園(写真協力:公益社団法人 鹿児島県観光連盟)



マングローブ群生地 ©Gaku Oniwa

サブストーリー Sub Story 1

大陸からの分断と隔離の歴史が、
世界自然遺産に認められた奄美大島の、
固有の生きものと命のにぎわいを生み出した

大陸から
分かれ
隔てられた…



独自の進化
をもたらした…

温暖多湿で
たくさんの
雨がふる…

命が
にぎわう…

水辺に暮らす
無数の生きもの
を育む…

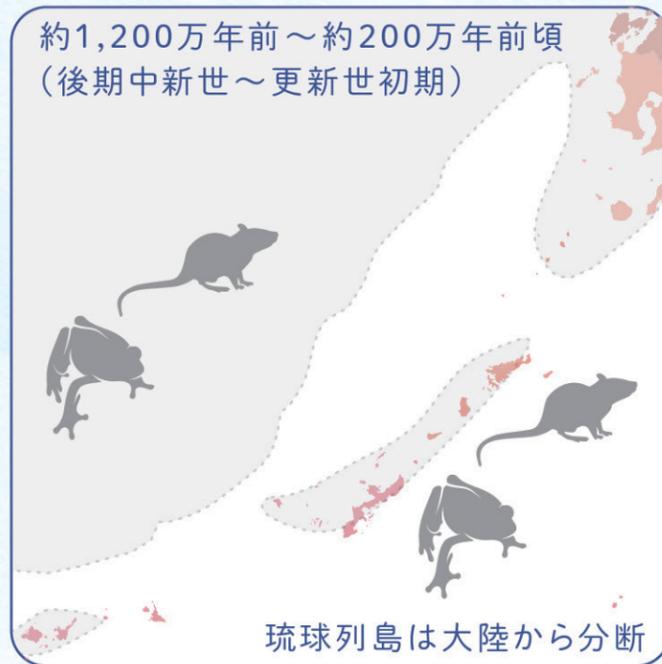
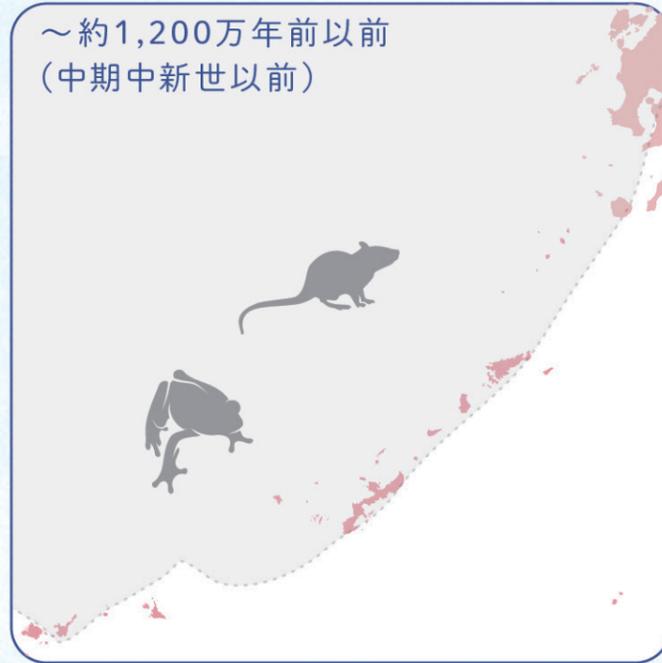
サンゴ礁が
広がる…

海の中を
命が
行き交う…

広大なマングローブ
湿地を生んだ…



大陸から分かれ、
隔てられた奄美大島は、
悠久の時を経て生きものの
独自の進化をもたらした



約1,200万年から200万年前にかけて起きた地殻変動により、現在の奄美大島を含む琉球列島はユーラシア大陸から分断された。そして200万年前以降の地殻変動により、島々はさらに分離し、奄美大島は誕生した。その後、この島は他の地域と一度もつながっておらず、島に残った生きものは限られた環境に適応し、長い年月をかけ独自の進化をとげた。その結果、奄美大島に生息する哺乳類の約6割、両生類の9割、爬虫類の約6割が、世界自然遺産地域にしかない固有種となった。

大陸から隔てられた歴史が育んだ生きもののにぎわいこそが、奄美大島が世界的にみても極めて貴重な場所として、世界自然遺産に登録される理由となった。



こうした多様な生きものの命を支えているのが、年間降水量約3000mmという温暖多湿な気候のもと育まれた、奄美大島の豊かな自然環境である。湯湾岳山頂周辺の雲霧林や亜熱帯照葉樹林、湿地、そしてサンゴ礁と黒潮の海が連なり、多様な命を育てている。

島の約8割は森林に覆われている。そのうち約6割がスダジイを中心とする、オキナワウラジロガンやアマミアラカシなどのブナ科の亜熱帯照葉樹林である。この森は、世界の亜熱帯域の中でも限られた地域にしか見られない特有の自然であり、湯湾岳や^{きんさくぼる}金作原周辺を中心に国内最大級の規模を誇る。

さらに、南方系と北方系の植物が入り混じって生育しており、132種の南方系植物がここを分布の北限としている。この風景は、この島ならではのといえる。



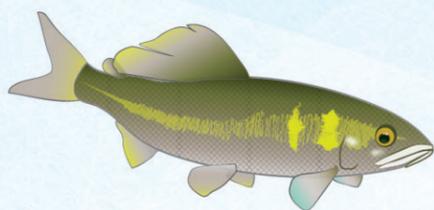
温暖多湿で雨の多い気候は、
国内有数の亜熱帯照葉樹林を育み、
命がめぐる森として
多様な生きものを支える





マングローブの湿地もまた、無数の生きものの命を育んでいる。外海からの波や風を和らげ、森から流れ込む栄養がたまりやすい蛇行した河川と合わさることで、マングローブの生育に適した条件が整えられてきた。

すみようがわ
住用川の河口には、国内有数の広さを誇るマングローブ湿地が広がる。この湿地は、リュウキュウアユなどの固有の淡水魚類、シオマネキやミナミコメツキガニなどの甲殻類、さらには多様な底生生物が集う生命のゆりかごとになっている。



マングローブ (写真協力:あまみの(一般社団法人あまみ大島観光物産連盟))

海岸と河川の特有の地形は、
 広大なマングローブ湿地を生み、
 水辺に暮らす無数の
 生きものの命を支える



アオンのリーフサンゴ礁 (写真協力:公益社団法人 鹿児島県観光連盟)

サンゴ礁が広がる
 奄美大島の海は、
 回遊する生きものを引き寄せ、
 命が行き交う舞台をつくる

海もたくさんの命が行き交う舞台である。南方から流れる温暖な黒潮とリアス海岸の複雑な入り江の流れ、そして透きとおる海水に生まれ、奄美大島には200種を超えるサンゴが生息していると考えられている。

このサンゴ礁に囲まれた豊かな海は、サンゴ砂が作り出すエメラルドグリーンと、黒潮が生み出す濃紺のコントラストを見せてくれる。ウミガメや色とりどりの魚、世界でここにしかないアマミホシゾラフグなど多様な生きものの命を育み、ダイビングやシュノーケリングの格好の場を提供している。さらに、島の周りを流れる黒潮の複雑な潮流により、ザトウクジラの通り道となり、マッコウクジラが集まる海域を作り出している。

このように、大陸からの分断と隔離の歴史が、世界自然遺産に認められた奄美大島の、固有の生きものと命のにぎわいを生み出した。



サブストーリー
SubStory 2

奄美大島の人々と自然との近さが、
島の価値観をつくり、
暮らしや風習を彩り豊かにする

〈自然の万物に
神が宿る〉

資源の持続利用

支え合い

感謝と思いやり

島の
精神として
継承

海や山に抱かれた奄美大島の自然は、
神への畏れと祈りを育み、
シマの暮らしと価値観を形づくる

自然を畏れ敬い、自然と共生する暮らしが、奄美大島の人々の結びつきや独自の風習を育んできた。

自然のすべてに神が宿るという考えは、今もなお人々の根底に息づく。奄美大島には、この島の開祖といわれるアマミク(アマミコ)、シニレクが、島のシンボルである湯湾岳に降りたという伝説(天孫降臨)と、海の彼方から来訪したという伝説(ネリヤ・カナヤ)があり、神話と歴史の舞台となっている。

奄美大島の集落は、海に面し、集落の背後には神聖な奥深い山が残る。この山には、山の幸の神が降り立つと信じられてきた。神々が通る神道は、常に綺麗に保たれ、海の彼方から訪れる神が迷わぬよう、立神と呼ばれる岩が道しるべとなる。神道の先の広場では八月踊りや豊年祭の奉納が行われ、山と海からの神を迎え、祈りや歓待をする神聖な場所となっている。さらに、姉妹が兄弟やその家族や集落を守るというウナリ神信仰も根強く残っており、女性自身を神として尊敬する面もある。そして、先祖の魂をコウソガナシとして大切に供養し、旧暦の1日と15日には墓参をしている。

また、神の領域への侵入を慎むタブーや戒めは、ガジュマルやアコウに宿るとされる妖怪ケンムンの言い伝えや、毒蛇のハブを森の守り神と考える価値観にも繋がっている。

このように、神々を畏れ、敬い、迎え、もてなし、送り出す特別な場所として、集落が形づくられている。



油井の豊年祭 (写真協力:あまみの(一般社団法人あまみ大島観光物産連盟))

海・川・山の恵みは、
人々の分かち合いと
結束を生み、
暮らしを豊かにする



高知山展望台
(©ぐーんと奄美)



大島紬(染め)
(写真協力:公益社団法人 鹿児島県観光連盟)



芭蕉の群生地
(©ぐーんと奄美)



大島紬(織り)
(写真協力:公益社団法人 鹿児島県観光連盟)

山と海に囲まれたシマで、人々は自然の恵みを衣・食・住に取り入れてきた。

例えばバシヤと呼ばれるイトバショウの繊維は、芭蕉布と呼ばれる美しい織物に姿を変え暮らしを彩った。鉄分を含む泥とシャリンバイの煮汁で絹糸を繰り返して染め、織り上げる大島紬は、その昔から紡がれる伝統の織物で、世界三大織物の一つとされている。耳をすませば、はたを打つ音色が今も響いてくる。

最高峰の湯湾岳に降る雨はジョンコ降りと呼ばれ、奄美大島最大の川、住用川を潤す。年間3000mmに及ぶ雨は川や地下水となり、人々は湧き水としてシマに引き、その水は今でも力水として豊年祭などの行事に欠かせない存在となっている。川はやがて海へ流れ出て、命輝く海の一部となる。人々はリュウキュウアユやモクズガニ、カキ漁などを通じ、海川の恩恵を受けた。

山々の木々は、家屋に利用され、糸を保管する穀物倉庫の高倉にも使われた。また、サトウキビから製糖をする際の薪や樽材、鉄道の枕木、パルプ用のチップ材として伐採が促進された歴史もある。自然からの恵みは、決して自分一人だ

けのものではなく、多くの人に分け与えるタマス分けという精神、稲作等の共同作業を通じて育まれた結束の精神は、三方を山に囲まれた環境で、互いに支え合ってきた証でもあり、奄美大島の強い絆の象徴となっている。

さらに、自分よりもまず相手を敬い、尊ぶ心を表す尊尊我無には、自然への敬意や人とのつながりへの感謝、命そのものを大切にするシマの精神が込められている。また、災いごとを見たり遭遇した場合に降りかかってこないように、「つつがなく」の意味合いもある。そのほかにも、自然も人も互いに支え合って生きていることを説く教えである「水や山うかけ、人や世間うかけ」も、この島ならではの価値観といえる。

本来、自然と密接な関係を持って生活してきた人間が古来から持っていた価値観・精神文化であったが、奄美では今もなお色濃く残っている。田中一村は、奄美大島の山や海が育む生きものの多様性と命を描き、その感動を多くの人々と分かち合った。芸術もまた、自然の恵みが生んだ豊かさの一つである。



田中一村記念美術館 (写真協力:公益社団法人 鹿児島県観光連盟)

山と海に囲まれた地形は、
 集落ごとに異なる風習を育み、
 その違いを八月踊りやシマ唄、
 シマグチに見ることが出来る



八月踊り 平瀬マンカイ
 (写真協力:公益社団法人 鹿児島県観光連盟)

歴史の変遷に伴い、各地域から伝わってきた文化は、山や海で隔てられたそれぞれのシマで独自に変化や進化をしながら、継承されてきた。

例えば、神事で踊られる八月踊りは、集落ごとに違い、豊作と平和を祈る踊りとして、今も継承され、学校教育にも組み込まれている。そのほかにも、ショチヨガマや平瀬マンカイなど多くの祭りが、稲作文化との関わりの中で生まれた。これら催事は、旧暦や十干、十二支を意識した日程や方角、時間により決められる。

さらに、シマ唄には、男女の掛け合い唄や豊作を祝う唄などがあり、地域の逸話、人生の厳しさや楽しさといった教訓が歌い継がれている。

地形が複雑で道も限られる奄美大島では、かつては集落間の交流さえ難しいものであった。シマの方言であるシマグチにも地域ごとの違いがあり、たとえば大和浜では丁寧な言葉遣いが、宇検では雅な言葉遣いが残ると言われている。

このように、奄美大島の人々と自然との近さが、島の価値観をつくり、暮らしや風習を彩り豊かにしている。

平瀬マンカイ
 (写真協力:あまみの(一般社団法人あまみ大島観光物産連盟))

サブストーリー
 SubStory 3

奄美大島の文化は、
 琉球や薩摩などの影響を受けながら、
 人々の知恵と希望によって力強く紡がれてきた



豚や鶏、ナリを生かした料理は、琉球や薩摩などの影響を受けながら、奄美大島のソウルフードとして今に伝わる

食文化にも奄美大島がたどってきた歴史の影響が色濃く映し出されている。その代表的な例が、豚や鶏、ソテツの実(ナリ)、素麺などを使った料理である。

豚の食文化は、琉球国や中国から伝わったとされている。かつては、各家で豚を育て、正月前の12月末に解体処理し、保存のために塩漬けなどにして頭の先から尻尾まで一年かけて余すことなく食べていた。現在でも、塩漬け豚や豚足などがソウルフードとして親しまれている。

また、鶏を使った料理の代表が鶏飯である。鶏飯は、もともと祝い事や客人をもてなす料理として振る舞われてきたが、薩摩藩統治時代には役人をもてなす接待料理とされ、その後広く人々に受け継がれてきた。

さらに、ソテツの実(ナリ)を使ったナリガイ(ナリ粥)は、奄美大島の厳しい歴史を物語る食である。やせた土地や急斜面でもよく育つソテツは、主食であるサツマイモが不作の時に備え植えられた。薩摩藩への年貢に苦しみ、飢饉時や戦時下、米軍政府統治下など、食べるのに苦労した時代に人々の命をつないだ貴重な存在で、そのことから命の恩人と言われた。毒を抜き手間をかけて作られたナリガイは、飢えをしのごための知恵の結晶であり、現在でもなり味噌として受け継がれている。

他にも、素麺や昆布も歴史と関わり深い食べものである。薩摩藩は、奄美大島で生産された黒糖を大阪の市で売り、大阪から戻ってくる際には奄美大島では生産されていなかった素麺や昆布などを島へともたらした。素麺は、やがて奄美の味として根づき、素麺でつくる油ぞうめんは家庭料理として、また年中行事で振る舞われる料理として、今も愛されている。

サトウキビと黒糖焼酎は、奄美大島の苦難の歴史を越えて、希望とともに受け継がれてきた



奄美大島の文化は、琉球国や薩摩藩、米軍の統治といった歴史のなかで、島特有の自然と人々の営みが重なりながら、独自の形へと育まれてきた。この物語を象徴するのがサトウキビと黒糖、そして黒糖焼酎だろう。

薩摩藩が産業として推し進めたのがサトウキビ栽培だった。重い税金に加え、余った場合は差し出す必要があり、自分たちでは自由に使えない、過酷な暮らしであった。

人々は、収穫したサトウキビを牛や馬の引く圧搾機(サタ車)で絞り、その汁をサタドリと呼ばれる小屋の釜で煮詰め、黒糖をつくり出してきた。

その黒糖と米麴を原料として生まれた黒糖焼酎は、今も奄美群島のみで生産が許可されている。米軍政府統治下で黒糖の自由な移出規制という苦難を乗り越え、人々の知恵と願いの末に生まれた歴史がある。黒糖焼酎を口にすれば、当時の人々の苦労と希望を感じることができる。



相撲は
奄美大島の歴史とともに歩み、
今も暮らしのすぐそばで愛されている

相撲の文化にも、奄美大島が歩んできた歴史が映し出されている。

奄美大島の組み相撲は、琉球国から伝わったとされ、もともと神様に奉納する神事として行われていた。

薩摩藩の統治が始まると、代官の前で披露される相撲が行われ、さらに日本復帰後には鹿児島県大会や全国大会に参加するために、統一された規則で競技としての相撲も行われるようになった。

現在でも相撲は、豊年祭などで執り行われるほか、部活動やクラブ活動として受け継がれている。男子は新生児の土俵入りからまわしをつけるなど、相撲文化は身近な存在である。奄美大島は日本で最も土俵が多い島と言われている。

かまえて
はっけよい!
のこった!



行 ゆき

井 わかし

中 あたり

保 たもつ

奄美大島の人々の苗字にも、島が歩んできた歴史が静かに刻まれている。漢字一文字の苗字が多く、それも縁起のよい漢字が目立つ。

薩摩藩統治時代、薩摩藩でも武士や郷士・郷士格(農業を営みながら帯刀を許された身分)のみが苗字を名乗ることを許されていた。奄美大島は、薩摩藩の支配にありながら、対外的には琉球国とされていたため、服装や髪形、苗字においても、薩摩藩の人々と差異を示す必要があった。人々は、黒糖の献上など功績を積み重ね、ようやく苗字を与えられた。また、薩摩や日本本土と区別するため、二字の苗字は許されず、一字の苗字のみが許された。

やがて、明治時代になり、すべての国民が苗字を持つことになる。当時の奄美大島では、既に一字苗字を持つ有力家が存在し、苗字は一字であるという認識が広く根付いていた。そのため、多くの人々が縁起の良い一字の苗字を新たに考案し、名乗るようになった。

奄美大島で生まれた人々は、
支配の歴史を乗り越えた喜びと、
新たな出発への希望を苗字に託した

南 みなみ

政 つかさ

恵 めぐみ

鶴 つる

文 かざり



奄美大島の港は、
琉球や薩摩、そして中国と人と文化を結び、
今につながる暮らしの礎を築いた

奄美大島の文化が、琉球国や薩摩藩の影響を受けてきた背景には、港の存在がある。

薩摩藩は、奄美大島や琉球を経由して中国や東アジア諸国との交易や交流を計画し、奄美群島を道の島と呼んだ。波の穏やかな内湾や大きな川の河口は船の出入りに適し、良港として人や物資の運搬を支えるとともに、役所も配置され、文化的な影響も強く受けた。

さらに、島役人が島内を異動・転勤することによって、衣・食・住などの文化や習慣が各地域に影響を与えた。

今私たちが目の当たりにする奄美大島の文化は、琉球国や薩摩藩統治、米軍政府統治など、複雑な歴史を経て形作られてきた、ここにしかないものである。このストーリーは、幾つもの時代を越え、人々の知恵と未来への願いによって力強く紡がれてきたといえるだろう。

サブストーリー
Sub Story 4

奄美大島の自然環境は、
島に暮らす人や島を訪れる人など、
全ての人の責任と行動によって
将来へと引き継がれる

将来の
奄美のために

唯一無二の奄美の自然を
よりよい形で将来へ引き継ぐため、
これからの私たちのひとり一人が
責任を持って行動することが
重要となる。

外来種を
持ち込まない!

入れない! 捨てない! ひろげない!
外来種の被害予防3原則。
奄美の自然を守るための
外来種対策が必要

密猟対策

捕獲・採取の確認
トラップ設置の禁止
捕獲・採取には許可申請が必要

ロードキル対策

事故多発区間や、カーブ区間での
「減速運転」
路肩に注意し、早期発見するための
「ハイビーム運転」
飛び出してくる、目の前にいる
「かもしれない運転」

簡単には元に戻せないという事実を、私たちに伝える

一度人の手で壊された自然のバランスは、

マンブース導入から根絶までの物語は、

奄美大島の生きものと人々の関わりを語る上で、外来種であるフィリマンブースの根絶は欠かすことができないエピソードだ。

フィリマンブースはもともと奄美大島にいた生きものではなく、ハブやクマネズミを駆除する目的で人の手によって持ち込まれた外来種だ。ところが、ハブを食べることはほとんどなく、アマミノクロウサギやアマミシカワガエルなどとも生息していた生きものたちを食べてしまい、奄美大島の貴重な生態系を脅かす存在となってしまった。

これを受け、奄美大島の生きものの命を守るため、2000年からマンブースの本格的な駆除が始まった。中心となったのは奄美マンブースバスターズだ。彼らは、奄美大島本来の自然を取り戻すという熱い想いを胸に、粘り強く活動続けた。そして約20年の歳月を経た2024年9月3日、ついにマンブースの根絶を成し遂げられた。アマミノクロウサギをはじめ、奄美大島にもともと暮らす生きものたちは徐々に回復してきており、本来の姿を取り戻しつつある。

しかし、人の手によって自然のバランスは簡単に壊れてしまうという事実を胸に刻み、自然とどう関わるべきかを問い続けることこそが、私たちが受けとる教訓である。



奄美マンブースバスターズ集合写真

祝 奄美群島国立公園 指定
いのち 生命にきわむ更熱帯のシマ〜森と海と鳥人の暮らし



イヌやネコを、
最後まで愛情と責任をもって飼うことが
奄美大島の生きものの命を守る

そして、今、その教訓が試されている。その代表的な例が、野生化したイヌやネコによる影響だ。

飼われていたイヌやネコが逃げ出したり、捨てられたりすることで野生化し、アマミノクロウサギやケナガネズミなどが捕食され、かつてと同様の危機が起こっている。この問題に対し、行政や民間団体が連携し、個体の捕獲や譲渡、普及啓発、モニタリング調査を進めてきた。その結果、危機は少しずつ減少しつつある。しかし、これらの取組みだけで、問題が解決するわけではない。

奄美大島に暮らす生きものを、これから先も守り続けるために欠かせないのが、私たち一人ひとりの役割だ。イヌやネコの飼い主には、不妊・去勢手術を行うこと、逃げ出さないよう適切に飼育すること、そして最期まで飼い続けるという、責任ある行動が求められている。





あなたの運転も、
アマミノクロウサギを守る
大切な取組の一つ

〈奄美大島での「3つの運転」〉

- ・事故多発区間や、カーブ区間での「減速運転」
- ・路肩に注意し、早期発見するための「ハイビーム運転」
- ・飛び出してくる、目の前にいる「かもしれない運転」



アマミノクロウサギはまた別の危機にも直面している。それが、車との衝突による死亡事故、いわゆるロードキルの増加だ。

私たちが使う道路は、アマミノクロウサギのすみかを横切っており、例えるなら家の中を車が走っているような状況だ。さらに、夜の道路では、黒いアマミノクロウサギは非常に見えにくく、ドライバーが気づいた時には避けられないケースも少なくない。

ロードキルを防ぐために必要なのは、特別な技術や対策だけではない。夜間の減速、ハイビームの活用、また、飛び出してくるかもしれない、という予防運転。その意識の持ち方や行動一つが、アマミノクロウサギや島に暮らす生きものたちの命を守ることにつながる。



あなたが島から
一つの命を持ち出すことは、
この島に生きる無数の命を
脅かすことにもつながる

奄美大島の生きものは、特有の環境の中で、無数の命が複雑につながり合いながら、長い年月をかけて育まれてきた。その多様性は、どれかが欠けると成り立たなくなるかもしれない、繊細なバランスの上にある。

しかし、近年、その小さな命が、島外への持ち出しによって、静かに失われつつある。現在、法令や条例により捕獲や採取が規制されている動植物は約120種に及ぶが、それ以外の生きものが大量に持ち出される事例が後を断たない。一つの命が島から消えること、それが積み重なることで、将来、生態系のバランスを崩すことにつながるおそれがある。

この先も奄美大島の生きものの命を守り続けるために大切なのは、島に暮らす人や訪れる人だれもが、島の生きものに対し島で生き続ける自然の姿を守っていきいたいという思いを共有することだ。





利用ルールは、
自然を将来に
引き継ぎたいと願う、
シマの人々の想いから
生まれた

こうした人と自然との間に生じるさまざまな課題に向き合い、命のつながりを将来へ紡いでいきたい。その想いと、シマの人々の根底にある価値観が重なり、数多くの利用ルールが生まれてきている。

金作原^{きんさくばる}では、来訪者の増加による自然への負荷を抑えるため、奄美群島認定エコツアーガイドの同行や、利用者数の制限といった取り組みが行われている。また、三太郎線^{さんたろう}周辺では、夜間の野生動物観察に伴う車両通行の増加により、ロードキルや野生動物へのストレス増加などの悪影響が懸念された。そこで、夜間の車両進入を事前予約制とし、利用台数を制限している。さらに、原始的な自然が残り、霊山としても大切にされてきた湯湾岳では、利用者の増加によって自然環境や厳かな雰囲気が損なわれることが懸念されている。保全ゾーンへの立ち入り自粛や、動植物を持ち帰らないといったルールを設け、自然環境の保全と持続可能な利用を目指している。

このように、人による様々な活動はそれまで保たれていた隔離された状態を変える可能性がある。

奄美大島の自然環境は、島に暮らす人や島を訪れる人など、全ての人の責任と行動によって将来へと引き継がれる。

世界自然遺産 金作原の利用ルール

World Natural Heritage Kinsakubaru Local Rules

世界自然遺産地域である金作原では、自然環境への負荷を軽減するとともに、安全を確保しながら質の高い自然体験の提供を図るため、地域で合意した利用ルールを定めています。

Kinsakubaru, World Natural Heritage area, has established rules in order to reduce the burden on the natural environment and provide a high-quality nature experience while ensuring safety.

【利用ルールの概要】 Kinsakubaru Local Rules

- 金作原（現在地からオキナワウラジロガシの巨木までの片道約2km）の散策は、奄美群島認定エコツアーガイド（有料）の同行が必要です。
To visit Kinsakubaru, you must be accompanied by an "Amami Islands Certified Eco Tour Guide".
- 奄美群島認定エコツアーガイド1名が案内可能な人数は最大9名までです。
One Amami Islands Certified Eco Tour Guide can guide up to 9 people.
- 同時に散策できるグループは最大10組までです。
上限に達した場合は、利用できません。
A maximum of 10 groups can stroll at the same time.
If the limit is reached, it will not be available.

奄美大島利用適正化連絡会議
環境省奄美群島国立公園管理事務所・林野庁鹿児島森林管理署
鹿児島県自然保護課・奄美市

このストーリーブックが伝えたいこと

このストーリーブックは、既存の資料や今まで行われてきたワークショップの結果を参考に、地域のみなさまとの意見交換会を経てつくられました。

以下の奄美群島国立公園管理運営計画のビジョンの実現するために活用しましょう。

1

世界自然遺産としての価値を 守り続ける生態系管理型国立公園

将来像

将来にわたって、固有で希少な動植物の生息・生育地が安定的に確保されるとともに、国立公園を訪れる誰もが生物多様性や生態系の豊かさを感じ、楽しみ、学び、満喫しましょう。

2

将来像

自然と人が深くかかわり 共生してきた文化を大事にする 環境文化型国立公園

地域の自然を上手に利用し継承してきた人々の営みの歴史・文化を国立公園の体験の一つとして利用者に提供し、地域の文化を次世代に引き継ぎ、内外へ広めていきましょう。

3

地域に活力をもたらす国立公園

将来像

国立公園づくりや世界自然遺産のブランド力を通じて、観光および農業をはじめとする地域産業が活性化し、地域の環境文化の継承や人々の交流が進み、地域の魅力向上と地域経済の好循環がもたらされ、地域がにぎわい、活力をつけましょう。

特に、奄美群島国立公園管理運営計画のⅣ. 管理運営方針((1)管理運営計画区の現状の課題 7)国立公園の価値に関する住民への普及啓発、(2)管理運営方針 基本方針2)に沿った活用も期待されます。



奄美群島国立公園
管理運営計画

島を守ろう

島に誇りをもとう

世界自然遺産に認められた自然も、歩んできた歴史も、育まれてきた価値観も、全てが“奄美大島ならではの”の魅力!自信と誇りをもってその魅力を伝えよう。

“奄美大島ならではの”をこれからもみんなと一緒に守っていくためにはどうしたら良いだろう?

魅力を隠してしまうのはもったいない…。島に暮らす人、島を訪れる人、ひとり一人が責任を持って行動できるようなルールや情報を発信しよう。

STORY
BOOK

ストーリーブックの思い

島をもっと知ろう

なぜアマミノクロウサギは奄美大島と徳之島にしかないの?
なぜ島中にたくさんの土俵があるの?身の回りにある“当たり前”が実は“奄美大島ならではの”の特別なものかもしれない。
まずは自分たちの島がどんなに魅力的か体験しよう!

ストーリーブック波及イメージ



適正な観光を推進する利用ルール

「貴重な自然環境の保全」と「満足度の高い利用」。これらを両立するために、各地域で利用のためのルールが設けられています。

湯湾岳、金作原、三太郎線周辺といった観光利用の多いエリアでは、立ち入り場所や利用時間、認定ガイドの同伴など、様々な自主ルールが設定されています。

自然と人の適正な距離感を保つことが、島の自然を守りながら楽しむために必要なのです。



次世代に引き継ぐための取り組み

かけがえのない自然を守り、次世代へ伝えるために何ができるだろうか。以下に紹介するのは、現在実施されている取り組みです。

①島の固有種を守るための取り組み

野生動物のロードキル、希少種の違法採集や島外への持ち出し、アマミノクロウサギの生息状況のモニタリング。島の特異な生態系を守るため、様々な対策が練られています。

②外来種の防除

奄美大島本来の生態系を、島民たちで取り戻す。そのために、生態系に悪影響を及ぼす外来種について、監視や侵入防止、拡散防止の対策が進められています。

③地域団体や研究者の協力

豊かな島の自然を保全するため、NPO・民間団体・企業など、様々な組織が力を出し合い、保全に携わっています。



ストーリーを実感できる、 おすすめの場所・体験

サブストーリー Sub Story 1

三太郎線での
ナイトツアーに
参加する



アマミシカワガエル

夜行性の生きものを観察しながら、ガイドからその生態について説明を受けることができます。



マングローブを
カヤックで散策する

マングローブに生息する生きものを観察することができます。広大なマングローブで自然と一体化したような気分も味わえます。

マングローブパーク
(写真協力:公益社団法人 鹿児島県観光連盟)

豊年祭などの
集落行事に参加する

相撲や八月踊りを見ることができ、受け継がれてきた風習が感じられます。



八月踊り 平瀬マンカイ
(写真協力:公益社団法人 鹿児島県観光連盟)

※神聖な場所への立ち入りや撮影制限されていることがあります。



大島紬(織り)
(写真協力:公益社団法人 鹿児島県観光連盟)

大島紬村を訪れる

大島紬の製造工程を見学できるほか、泥染めも体験することができます。

サブストーリー Sub Story 2

サブストーリー Sub Story 3

郷土料理屋で
島の料理と黒糖焼酎を味わう

鶏飯や油ぞうめん、黒糖焼酎など、奄美大島ならではの食べものとお酒を味わうことができます



鶏飯 (写真協力:公益社団法人 鹿児島県観光連盟)

黒糖工場を
見学する

サトウキビから黒糖ができる工程を間近で見学でき、できたてを購入できる工場もあります。



金作原を奄美群島
認定エコツアーガイドと
一緒に歩く

奄美大島ならではの固有種や亜熱帯植物等の説明を受けながら、質の高い自然体験をすることができます。



アマミテンナンショウ

奄美大島世界遺産センター、
奄美野生生物保護センターを訪れる

奄美大島世界遺産センターでは自然を守るための取り組みやルール、奄美野生生物保護センターではマングース根絶までの道のりを知ることができます。



サブストーリー Sub Story 4

奄美群島国立公園

鹿児島県の最南に位置する奄美群島は、日本を代表する自然の風景地の1つとして、2017年(平成29年)3月7日に34番目の国立公園として指定された。

島ごとに、豊かで多様な自然環境と固有で希少な動植物からなる生態系、そして人と自然の関わりから生まれた文化的景観が残されている国立公園。



世界自然遺産「奄美大島、徳之島、沖縄島北部及び西表島」

奄美大島、徳之島、沖縄島北部及び西表島。この4つの島の陸域が、2021年(令和3年)7月26日に日本で5番目の世界自然遺産として登録された。

世界自然遺産地域の面積は日本の国土の0.2%に満たないながら、生息する国際的絶滅危惧種は95種、そのうち固有種は75種を数える。

また、生育する維管束植物が1,819種におよぶなど、世界の生物多様性ホットスポットの一つである日本の中でも生物多様性が突出して高い地域であることが評価され、世界自然遺産として登録された。



アダンと国直海岸 (写真協力:公益社団法人 鹿児島県観光連盟)

参考文献

文書・資料

世界遺産一覧表記載推薦書 奄美大島、徳之島、沖縄島北部及び西表島『推薦書』『包括的管理計画』『奄美大島行動計画』環境省

<https://kyushu.env.go.jp/okinawa/amami-okinawa/world-natural-heritage/plan/index.html>

『奄美群島エコツーリズム推進全体構想』『自然観光資源一覧表』奄美群島エコツーリズム推進協議会（環境省）

<https://www.env.go.jp/nature/ecotourism/try-ecotourism/certification/amami/index.html>

『奄美群島の残したいもの伝えたいもの～12集落の宝もの～』奄美群島広域事務組合
http://www.amami.or.jp/nokoshitai_tsutaetai/

『博物館が語る奄美の自然・歴史・文化―奄美博物館公式ガイドブック』奄美市立奄美博物館

ホームページ

【奄美群島国立公園ホームページ】環境省

<https://www.env.go.jp/park/amami/index.html>

【奄美大島世界遺産センターホームページ】奄美大島世界遺産センター

<https://amami-whcc.jp>

【奄美野生生物保護センターホームページ】環境省

<https://kyushu.env.go.jp/okinawa/awcc/amami.html>

【奄美大島・加計呂麻島の観光サイト 世界自然遺産あまみの、】一般社団法人あまみ大島観光物産連盟

<https://www.amami-tourism.org/>

【奄美市立奄美博物館ホームページ(奄美遺産)】奄美市立奄美博物館

<https://amamiisan.com/category/amamiisan/>

【奄美群島の情報誌Horizonホームページ】ホライゾン編集室

<https://amami-horizon.com/>

【大和村ホームページ（大和浜のオキナワウラジロガシ林）】大和村

<https://www.vill.yamato.lg.jp/kyoiku/shisetsu/kanko-spot/010.html>

【かごしま文化財事典ホームページ】鹿児島県教育庁文化財課

<https://k-bunkazai-school.com/>

【世界自然遺産 時を紡ぐ、彩りの島 奄美・沖縄ホームページ】

<https://amamiokinawa.jp/>

自主ルール

《奄美大島・金作原における利用ルールの運用について/Kinsakubaru Local Rules》鹿児島県

<https://www.pref.kagoshima.jp/ad13/kurashi-kankyo/kankyo/amami/kinsakubaru.html>

《奄美大島の三太郎線周辺で「夜間利用ルール」》トラベル Watch・環境省

<https://travel.watch.impress.co.jp/docs/news/1349652.html>

<https://coubic.com/santaro>

《湯湾岳利用ルールの試行開始について》環境省

https://kyushu.env.go.jp/okinawa/press_00019.html

《自然への配慮について(奄美群島マナーガイド等)》鹿児島県

<https://www.pref.kagoshima.jp/ad13/kurashi-kankyo/kankyo/amami/03007707.html>

《鯨類ウォッチング暫定自主ルール》奄美クジラ・イルカ協会

<https://amamiwhale.jimdofree.com/>

《大和村国直集落「ローカルルール」》大和村

<https://www.vill.yamato.lg.jp/kensetsu/shisetsu/sunahama/005.html>

《動植物持ち出しに関する共同文書》奄美市

<https://www.city.amami.lg.jp/wnhs/kyoudoubunsyoun.html>

《奄美大島で運転される方へ 知っていただきたい「3つの運転」》環境省

<https://kyushu.env.go.jp/okinawa/awcc/roadkill-measures.html>

写真提供者

沖縄奄美自然環境事務所

公益社団法人 鹿児島県観光連盟

一般社団法人 奄美群島観光物産協会

一般社団法人 あまみ大島観光物産連盟



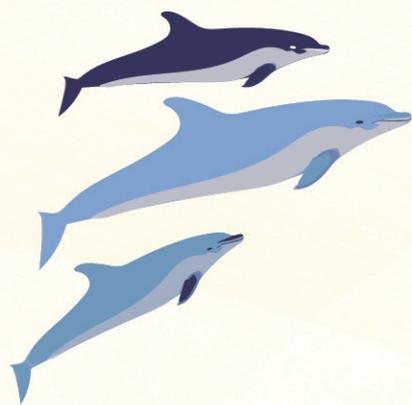
発行
2026年3月

編集
株式会社 自然教育研究センター

デザイン
トーキョー・テンドー・テーブル株式会社

発行者
環境省奄美群島国立公園管理事務所

リュウキュウアサギマダラ (写真協力:公益社団法人 鹿児島県観光連盟)



環境省奄美群島国立公園管理事務所